

博士論文の要約

氏名 白福英

論文題目 中国・内モンゴルにおける漢民族の牧畜活動に関する研究

——モンゴル民族との関係の視点から

本論文の目的は、主に中華人民共和国成立後の時期に、自然災害と大躍進による飢饉によって内モンゴル自治区のオラド後旗に移住してきた漢民族の牧畜活動の実態を民族誌的に描き出すとともに、彼らが牧畜に従事することによって生じたモンゴル民族との共存・共生関係を明らかにすることである。

本論文は、序論、結論を含めて6章からなる。第1章に当たる序論では、牧畜をめぐる研究について、その定義、家畜管理技術、牧畜形態、土地へのアクセスの在り方などの4つの観点から検証し、これらのテーマに照らし合わせ、まず牧畜社会一般における内モンゴルの牧畜の位置づけは定牧であることを明らかにした。それから文化人類学的視点から内モンゴルに関する研究の蓄積を展望し、遊牧に重点を置く牧畜研究と漢化に重点を置くモンゴル民族の農耕化に関する研究という2つの傾向があることを指摘し、本論文で扱う漢民族の牧畜活動は既存の研究枠組では捉えきれないことを浮き彫りにした。その上で、内モンゴル牧畜社会の多様性を漢民族の牧畜活動に関する分析を通して明らかにすることを、本論文の視座とした。本論文の研究対象に関する先行研究では漢民族の牧畜の状況への言及にとどまり、その実態が十分に解明されているとは言い難い。また、漢民族が牧畜に転じたことによって形成された民族間関係も検討されていない。そこで本論文では、上記の研究目的を完遂すべく、計8カ月間の現地調査に基づいて、文献資料と一次資料を収集した。

第2章では、調査地であるオラド後旗およびMガチャーについて概観した。具体的には、まず、オラド後旗の行政の歴史的沿革を整理し、オラドは部族名称としての意味合いが薄れて地域名として定着していることを確認した。次に、オラド後旗の自然条件および牧畜の形態について記述し、内モンゴル牧畜におけるオラド後旗の牧畜の位置づけはヤギとラクダを中心とした荒漠草原の牧畜であることを示した。その上で、中華人民共和国が成立してから現在に至るまでの牧畜政策の影響によって遊牧から定牧に移行したことを指摘した。また、漢民族が行政末端であるガチャーレベルでも多数を占めるようになり、牧畜の担い手にも加わるようになった社会的背景を分析した。最後に、モンゴル民族と漢民族が混住するMガチャーの成り立ち、自然環境、人口状況、牧畜形態や牧草地の在り方について詳述した。

第3章では、漢民族の牧畜活動の実態について、家畜管理技術を中心に記述し、モンゴル民族のそれとの比較を通じて、その特徴を論じた。まず、人民公社の牧夫であった漢民族が、人民公社が解体され、集団の所有であった家畜が社員に払い下げられることにより家畜を所有するようになった経緯と、現在使用している牧草地の面積および所有する家畜頭数を示した。次に、新聞記事などのメディアにおいて、牧畜に転じた漢民族に関する表象の変化

が見られることを明らかにした。そして、漢民族の牧畜活動の1年間のサイクル、家畜の個体認識、管理技術について記述した。最後に、両民族の家畜管理技術を比較して、漢民族の牧畜活動は生業的性格が強く、モンゴル民族の牧畜文化的性格が欠如していることを指摘した。

第4章は、内モンゴルという個別社会の文脈におけるローカルタームとしての牧畜民/非牧畜民〔モンゴル語: マルチン (malcin) / マルチン・ビシ (malcin-bisi)、漢語: 牧民 (mumin) / 非牧民 (feimumin)〕の境界を決定している要因について考察したものである。具体的には、まず、牧畜を継続しているモンゴル民族と漢民族、牧畜をやめたモンゴル民族と漢民族というように、牧畜と民族を四象限に分け、漢民族の個々人の生活略史に即して、オラド地域へ移住した経緯、牧畜技術を身につけた過程、および牧畜民意識の形成について記述した。次に、漢民族の牧畜民という自己同定がモンゴル民族側から拒絶され、非牧畜民と見なされ、「マルラダグ・ヒヤタト (malladay kitad) = 牧畜に従事する漢民族」という、牧畜を行う漢民族の出現によって生み出された新しいモンゴル語の用語によって下位に序列化されていることを指摘し、自己レベルと社会的承認レベルにおけるズレが生じていることを明らかにした。最後に、ローカルタームとしての牧畜民/非牧畜民の境界を決定づけている要因として、漢民族の牧畜活動にモンゴル民族が持つ牧畜文化的側面が欠如していることを示した。

第5章では、モンゴル民族と漢民族の関係を通婚、年中行事、擬制的親族関係に着目して検討した。まず、通婚に関しては、個人の語りの分析を通じて、家畜管理における相互扶助関係により生まれた地縁的連帯関係が両民族間の通婚を促していることを明らかにした。そして、「退牧還草」政策に直面した際、通婚パターンによって牧畜をめぐる異なる選択をしていることを指摘した。次に、年中行事では、「中元節」と「中秋節」に漢民族のモンゴル民族への対立意識が見られることについて述べた。最後に、擬制的親族関係では、漢民族の「乾爹」とモンゴル民族からの養子についての事例を取り上げ、両民族間の助け合う関係を示した。こうした分析を通して、両民族間に対立意識と相互扶助という相反する要素を含む関係があることが確認され、両民族間の関係が対立かそれとも融合かという二元論的な構造では捉えきれないことを指摘した。

第6章の結論では、各章の内容をまとめた上で、序論で提示した問題意識に対して次の2つの点から考察を行った。第一に、漢民族の牧畜活動の特徴をまとめ、モンゴル牧畜文化の枠組で捉えきれない漢民族の牧畜活動の在り方を示した。これによって、既存の内モンゴル研究における民族と生業の結びつき、すなわち「モンゴル民族=牧畜民」、「漢民族=農耕民」という固定的イメージを相対化し、先行研究の問題点を乗り越えて内モンゴル牧畜社会の多様性に関する考察を進めた。第二に、牧畜という生業に着目した民族間関係の分析から、両民族の間に相反するベクトルを内包する関係が見られることを明らかにした。こうした相反する要素を含んだ共存・共生関係に関する本研究は、「中華民族多元一体論」に関する従来の文化人類学的研究に対して、中国の民族間関係をめぐる状況は決して単純な漢化と

はならないことを示すとともに、文化的差異を維持しつつ、生業を共有することによって共存・共生関係が生み出されていることを指摘したものである。つまり、上から民族間関係を調整するのではなく、地域社会が自己調整的に生み出した経験知としての共存・共生関係の実態を重視すべきなのである。